

私たちの国際理解

信州大学大学院 2年 青柳にし紀

学部 4年 岡部千寿・君島芙美・斎藤有紀恵・
佐々木清美・博多理恵

学部 3年 坂下智美・関淳奎（世話人）

学部 2年 於本七瀬・城間友美・中野真樹

（2000年3月10日執筆・所属は当時）

韓国旅行を終えて

信州大学大学院人文科学研究科 2年 青柳にし紀（言語文化専攻）

私の知る韓国人は、今回の旅行でお世話になり、同じ沖ゼミで勉強する仲間である関さんを含む、留学生数人だけであった。彼らが、どのような経緯で日本に興味を持ち、また日本語を勉強しようと考えたか、その背景を知ることが沖ゼミ旅行に参加する私の目的の一つであった。同時に、日本とは異文化である韓国の風土・風習・気質・言語を肌で感じ、韓国における日本人観はどのようなものであるか、知ることをもう一つの目的に旅行の日を迎えた。

飛行機から降り、はじめに出会った現地の韓国人は、関さんと一緒に出迎えに来てくれた CATHOLIC 大学校の学生たちであった。皆、私たち日本人の大学生と同じく、おしゃれや流行に興味を持つ普通の若者であった。また、私たち日本人を心から歓迎してくれる気持ちが痛いほど伝わってくる。韓国の学生たちの歓迎は、三日間の旅行を通して変わらず、その気持ちがとても嬉しかった。

ソウル市街を歩いても、言葉や食べ物などの習慣を除いて、日本とさほど変わる点はなかった。電車などに乗っていると、まるで日本にいるかのような錯覚すら覚えた。電車の中で親切に席を譲ってくれた人や、たどたどしい英語で親切に話しかけてきたホテルのフロントの人、また、笑顔で接してくれた店員さんなど、多くの親日的な人と接することができた。

一方で、そうした親日的な感情だけでは表現しきれない部分を垣間見る機会もあった。特に、独立記念館の見学や、その後の CATHOLIC 大学校の学生との討論会を通じて、そのような感情を知った。

旅行中、私は、親日的な韓国人の熱烈な歓迎を受けて、日韓両国の国交問題を忘れていた。しかし、日韓問題は未だ根強く残っていること、そして、これまで私が日韓問題に関して、いかに無関心であったか、ということ独立記念館の見学で実感した。さらに、日本の国家侵略に対しての日韓両国の捉え方の違いも知ることができ

た。日本の教科書では、わずか数行で述べられている程度の問題が、韓国の人々にとってとはとても重大な問題であることを、記念館の展示や CATHOLIC 大学校の学生の説明で知ることができた。たとえば、伊藤博文を暗殺した安重根、3・1 運動のデモ行進の中心となった柳寛順について、日本ではさほど関心が持たれていない人物が、韓国で崇拜されているといった点である。独立記念館の翌日行われた討論会では、私たち日本人学生と同様に無関心な韓国人学生もいた様子だったが、学校や祖父母に「日本が悪い」と教えられてきた学生もいたことから、日韓問題が韓国に根強く残っていることを強く感じたのである。

独立記念館の第3展示館において、日本帝国主義が朝鮮を侵略していった過程が紹介されている。この日本による国家侵略の問題を説明する際、CATHOLIC 大学校の学生は、言葉を選びながら、ポツリポツリと話した。それは、「日韓問題は両国にとって、辛い問題である」として、加害者であった私たちに配慮したためであった。そして、「これからは現代の若者たちが、日韓の関係を改善し、発展させていくべきだ」と述べたことに共感を覚えた。

第3展示館にある、日本人の朝鮮人に対する拷問の展示の後の部分に、わずか3行程度で日本語の説明が添えられていた。「このようなむごい展示をあえて行ったのは、事実を多くの人に知ってもらうためである。日韓問題を私たちは許すことはできるけれども、忘れてはならない問題として後世に伝えなければならない。」といったような内容であった。それまでの展示は、ハングル語と英語のみの説明であった。拷問の展示部分だけに、なぜ日本語の説明を添えたのか、その意味の大きさについても考えさせられた。

これまで、日本人の一人一人は悪いことをしたという反省を持っていたのに韓国の人々の側が心を開いてくれていないのではないかと私自身誤解をしていたところがあった。しかし、実は、建設的な日韓関係を持とうとしていた韓国の人々の意見を日本人が受け流していたのではないかと考えを改めた。私たちの世代は、戦争とはかけ離れた生活を営み、日々安穩のうちに暮らしている。その生活に甘んじて、平和だというのは実にたやすい。しかし、その平和は、単なる無関心の上に成り立っているだけである。同じ過ちを繰り返しかねない。ソウル市内の至るところで、若い軍人の姿を見かけた。また、私たち日本人と全く変わらない生活を過ごしている学生が、「恋人は軍人なんです」という言葉を発したとき、世界のどこかで必ず戦争をしている人がいるのだということを想起させた。

私たちは、戦争を知らない世代である。それは、ときに憎しみを知らない平和な心を持ち、ときに無関心という危険な側面をも持つ。平和な生活は、常にそれが崩れる危険をもつということを忘れてはならない。そして、戦争という過ちを二度と繰り返

さぬよう日々戒めることが必要であると感じた。

今回の旅行では、親日的な多くの人々と、一方には戦争の傷跡を未だ持つ人々がいる2つの顔を持つ韓国を見た。どちらが韓国人のほんとうの顔であるのか。おそらくどちらも事実であろう。

平和な時代が50年続き、韓国と日本との距離も次第に近づきつつある。この情勢を生かすか殺すかは、これからの私たちに委ねられている。戦争の過ちを繰り返さないよう、また、より韓国との国交が発展するよう志したい。私たち戦争を知らない世代だからこそ、日韓の距離を縮めることも可能であると思う。そして、多くの人々に日本語を学びたいと思ってもらえるような日本を築きたいと考えた。

韓国旅行を終えて、はじめ目的としたものを十分に整理するには至らなかったが、韓国という国について様々なことを感じる事ができたことは確かだ。また、韓国をより身近に感じる事ができたという点でも有意義な旅行であったと思う。

旅行に際し、沖ゼミの私たちに快く歓迎して下さった姜先生に御礼申し上げます。また、CATHOLIC 大学の皆さんやパートナーの徐さんのおかげで韓国旅行が楽しく、豊かなものとなりました。今回の旅行で感じたことを心の糧としたいと思います。

終わるにあたり、このような貴重な機会を与えて下さった沖先生、日韓の架け橋として支えて下さった関さんに心から御礼申し上げます。

韓国旅行を振り返って

信州大学人文学部4年 岡部千寿（日本語教育学専攻）

今回の4日間の旅で得られたもの、それは大きく3つに集約できると思う。1つは、日本が韓国に対して行った過去の抑圧の知られざる事実である。また、1つは、韓国の学生と過ごし、韓国の学生の考えや生活を直接肌で感じる事ができたこと。そして、もう一つは、外国人としての異文化の体験である。

まず、一つ目の抑圧の事実に関してであるが、どうしてこれほどまでに我々日本人は近代以降の歴史を学ぶ機会が少ないのかと疑問を発したくなる。決して事実を知らないわけではないが、その詳しい内容となるとほとんどと言っていいほど教えられてきてはいない。私自身、参加する前に本を読み、多少なりとも知識を得るまでは、抑圧の実態・残虐さに関しては無知であったように思う。実際、韓国において独立記念館を訪問したときは、自分も残虐な行為を行った日本人と同じであることに気味の悪さと恥ずかしさを感じた。特に日本人による韓国人への生々しい拷問の展示は、日本人である自分にとって非常にショッキングなものであった。しかしこれを知らなければ自分の韓国の人への接し方において無意識のうちに傷を抉るようなことをしたり、不自然な陰を落とすことになったかも知れない。自分の目で現実を確認することがで

きて良かったと感じた。また、韓国の学生と共に見学し話し合いをもったことにより、今の韓国の人々が、当時の日本の軍国主義の中で罪を犯してしまった人々と、現在の日本人を明確に区別して認識しており、これからの両国の関係についても発展的な意識を持っていることを感じられたのは救いであった。日本においては現在の教育のもとでは、実際に当時何があったのかを若者のほとんどは認識できていない。原爆や沖縄戦、東京大空襲などの日本の被害が脈々と語られているのと同様に、韓国では日本が負わせた傷が語り継がれていることを我々は知るべきであろう。当時軍国主義の流れに吞まれてそれに関わってしまった人が心に傷を負いながらも生きており、彼らにとって触れられたくない覆い隠したいものであることも理解できる。しかし目をそむけ続けているわけにはいかないし、将来へ歪んだ形で伝えてもいけない。我々は事実を知り、それを反省の糧とすることで、よりよい明日を想像していかななくてはならないと思う。日本人にとっては非常につらいことであるかもしれないが、同じような歴史を繰り返さないためにも、被害国・日本という側面だけでなく、加害国・日本という側面も、よく心に留めておく必要があると思う。なぜなら、これは、ただ過去を振り返って反省するというだけでなく、これから未来の両国間の平和をいかに継続していくかということを考える上でも重要になってくると思うからである。私は、自分の目で過去をしっかりと見つめることにより、戦争がいかに残虐で無益なものであるかを確認し、過ちを繰り返してはならないという気持ちが強くなるのを感じた。拷問の展示のところに、日本語で書かれていた言葉を私は決して忘れない。「過去の不幸な歴史の加害者を許すことはできるが、決して忘れてはならない事実である」この言葉はまさに全日本人、全韓国人に向けて書かれた言葉であろう。

今回の独立記念館の見学・韓国の学生との討論から、日本と韓国だけの歴史にとどまらない戦争についても考えることとなった。展示物の中にあつた日本軍の処刑に関する数点の報告書。人が人を殺すことが何とも思われない世界があつた。明確な「敵」が存在し、周りが皆人を殺していれば、そのうち人は「なぜ殺すのか」ということを考えることをやめる。なぜなんて考えてはいけない。普通通りに考えたら悪いことだと分かっている。そう考えたら生きていけないから考えることをやめる。そのとき人を殺しても非難されることはないのだから怯えることもない。「戦争」とはそういうものなのだと思う。私たちの今の日常では考えられないような特殊な状況の中で、一体どれだけの人が理性を保ち続けていけるのだろうか。つまり、戦争というものは、始めてしまつてはいけないのだ。戦争が起こる前に阻止しなくてはならない。しかし今もなお戦争は起こっている。日本だって、防衛費という名の膨大な「軍事費」が、国会の予算に盛り込まれている。「戦争と大量殺戮の世紀」と言われる20世紀。日本人として忘れてはならない事実をしっかりと目にすることができたので、これからの判

断の糧とすることを心に誓った。

また韓国の学生と話をすることで、本当に彼らはよく勉強しているなど感心させられた。会ってみるまでは、こんなに交流ができるとは思っていなかった。専門的に日本語を学び始めたのは大学からだというのに、日本人と変わらないほど日本語を聞き取れ、流暢に話すことができる人も多かった。一方、私といえば、10年間学んできた英語を使いこなすことさえままならない状態である。韓国の学生たちと出会ったおかげで、自分も目標を持ってもっと頑張っていかなければならないと思うようになり、いい刺激になったと感じている。こうした、韓国の学生との交流によって自分を自発的に向上させようという刺激を得られたことは後々の人生を歩む上において非常に大きいものになると思う。

韓国の学生との交流は、お互いに話すことが新鮮かつ刺激的なものであり、時間が流れていくのを忘れてしまう程であった。そして、初めは初対面かつ国籍も違う者同士が4日間の交流を経て、帰り際には涙を流して分かれていく。この時、こんなに短い間であるにも関わらず、親密になる人の縁につくづく不思議なものを感じた。それはこの旅行で得た大きなものの一つであると思う。

最後に、異文化の体験である。海外を旅行するのは初めてではないが、今回も自分が「外国人になる」ことを非常に楽しみにしていた。韓国における「外国人」の気持ちとはどんなものなのだろう。やはり周りから奇異の視線を向けられて決まり悪い思いをするのか、それともアジアということではさほど違和感を感じないのだろうか、などと想像していたが実際にはその両方だったといえる。そこでは確かに私が生まれ育った国とは異なる常識の中で人々の生活が営まれており、自分が異文化からやってきた人間であるということを感じさせたのは事実だが、それと同時に、日本人も韓国人も結局は同じ地球上に住んでいる人間であることに違いはない、という印象も受けた。地球のある意味での広さと、またある意味での狭さ、また日本と韓国というちょっとした距離を移動しただけでもこんなに違った文化が存在するという驚きと、地球上どこに住んでいようとも人々が毎日の生活を一生懸命おこなっているということに変わりはないという親近感を、実際に異文化を体験することによって経験としてつかむことができたと思う。

今回、この旅行に参加して、様々な面で学ぶ点が多く、非常に濃密な時間を過ごすことができた。これは、ひとえに参加した全ての人々のおかげであり、交流をもったすべての人々のおかげであり、皆に感謝したい。今後、個々の生活に戻っていくわけだが、旅行中と同じように充実した日々が過ごせるように努めていきたいと思う。

韓国旅行を終えて

信州大学人文学部 4年 君島美美（日本語教育学専攻）

2000年3月6日から9日の4日間、沖裕子先生の御提案に始まり、沖先生率いる信州大学人文学部日本語教育学専攻の有志学生総勢11名で、隣国韓国を訪問した。本レポートではその韓国での4日間の滞在の中で、実際に見て感じて考えたことをまとめ、述べておきたい。

私にとって、今回の韓国旅行の最大のポイントはやはり、全日程を通じて韓国のカトリック大学校で日本語を学ぶ学生の方々と行動を共にしたということである。韓国についての初日の夜から帰る前日の夜までの時間をほとんど全て彼等と過ごしたということは私の中で非常に大きかった。その事によって、韓国という国、そして韓国の人々を一人の日本人として外側からただ客観的に眺めるだけではなく、多少なりとも個人と個人として主観的に感じる事ができたということが大きかったとも言える。同世代のしかも女性だということもあり、国の違いにとらわれず共通する部分を感じるのと同時に、韓国と日本という国の存在を後ろに感じる場面もやはりあった。独立記念館の見学というのが今回の旅行あるいは交流の一つのメインイベントであったが、互いに日本人であり韓国人であるのと同時に、同世代の女同士の友人としてそこへ共に行き、互いに感じ考え、そしてまた後にその事を交換したことで、そうした事を深く感じ考える事ができた。以下、独立記念館の見学と翌日の討論会でのことを中心に振り返りたい。

独立記念館というのは、韓国の歴史が全七館に渡って古代の建国から現代まで資料等展示物と共に語られているところであるが、その壮大さは韓国の人々の民族としての誇りが非常に強く伝わってくるものであった。しかし、その中で豊臣秀吉の侵略と日帝時代とその前後の歴史というのは、私たち日本人にとっては自分たちの国がかつて犯した事実をまざまざと見せつけられるものである。そこで語られる歴史は日本が国として事実を認めながらも未だ目をそらしている歴史であった。日本の教科書では世界史のほんの数行あるいは1、2ページほどのスペースで語られてしまうものである。事実の一つでも、それをいかに語るかで認識が変わってしまう。日本の教育が原爆を始め被った傷ばかりを強調したものであることはよく言われることだと思うが、この独立記念館が逆に韓国におけるそうしたものなのかどうかはわからない。しかし、それが多少誇張を含むものであろうがなかろうが、大小にかかわらずやはり現実に日本がそれだけ罪を韓国に対して犯してしまったのだということは重く謙虚に受け止め、まずは謝罪の気持ちを見せる必要がある。他の国他の時代でも同様のことがあるし、日本だけの問題ではない。しかし、まずは一つの時代の中で日本が韓国に対して残虐な行いをしたというその事実を受け止めなければならないだろう。そうして謝罪と許

しを超えてそこから始めて新しい関係が築けていけるのだろう。今回、こうした日韓の歴史を日本人と韓国人として、そして互いに国を越えた一人一人の友人として共に見ることができたのは本当に貴重な経験であったと思う。翌日の討論会の中で、韓国側の意見として忘れてはならない歴史だがそれに縛られず新たな関係を今は築いていきたいということを書いてくれたが、それが言葉だけではなく、見学の間中、一人の歴史の傍観者として淡々と、しかし真剣に日本語で説明してくれた姿からもよくよく伝わってきたことがとてもうれしかった。また国としてではなく私たち日本人の一人一人がどう捉えているか、ということが伝わり、互いの考えや感じ方を直に確認しあえたことは本当に貴重であった。そして、最後にこれだけの傷を日本から受けた歴史がありながら、なぜ日本語を学ぼうと思ったのか、ということを書ねてみた。歴史は歴史であり、これからの私たちはそこにとらわれず進むべきであり、歴史を知り受けとめることと、今の自分たちの世代が日本の若者の文化に興味を示し日本語を学びたいと思う気持ちは、全く別だということであった。

今回、この独立記念館を一緒に見学しそしてそれについて意見を交換し合い、その他、たった3日という短い期間ではあったがそれでもその間中共に過ごす中で、様々な面を互いに見せ合うことができたと思う。こうした小さな交流の一つ一つが国と国との関係を変えていくのだろう。しかし、今回は日本語教育専攻と日本語専攻という一つの特異な関係でもあり、興味を示している側と示されている側、といったところがあった。相互によく知り合うためには一方が興味を持つのではなくもう一方も同様に興味を示す対等な関係を今後につくっていかなければならない。

韓国研修旅行を終えて

信州大学人文学部4年 斎藤有紀恵（日本語教育学専攻）

1. 目的

今回の旅行には、個人として大きく2つの目的を持って臨んだ。一つは「韓国の文化や歴史を理解すること」であり、もう一つは「日本語教育の現状を知ること」である。日本と韓国は隣国の関係にありながら、私は文化や歴史についてあまり多くの知識を持っていなかった。特に歴史に関しては、中学・高校の歴史の授業における教科書記述の範囲を超えていなかったように思う。現在の韓国における認識も薄かったと言わざるを得ない。生の韓国文化に触れることができるこの機会に韓国に対する理解を深めていきたいと考え、またそうすることで日本文化の理解へともつなげると考えたのである。日本語教育に関しては、まず日本国外における日本語教育であることを前提に、学習者の動機や態度、また教授活動の実態などについてできるだけ多くの知識を得たいと考えていた。これらの目的は4日間の滞在において、多少の差はありな

がらも達成されたといえるだろう。以下、目的に沿って特に感じたことについて述べていきたい。

2. 日本人の歴史的事実への関心の薄さ

視察旅行2日目、天安にある独立記念館の見学を行った。独立記念館では古代から現代に渡る韓国の歴史を知ることができた。三国時代の頃から現在の大韓民国が成立するまでの文化や出来事について学ぶことができた貴重な経験であったと思う。特に対日関係については全7館あるうちの2館において展示されていた。教科書にほんの数行で書かれていたことが、多くの資料や説明文によってその詳細が明らかにされていた。その内容が「真実」であるかどうか鵜呑みにはできないが、日本による朝鮮半島侵略や拷問といった事実があったことは日本人として知らなければならないことである。けれども私にはその認識がほとんどなく、特に拷問についてはロウ人形によってそれが再現されており大きな衝撃を受けた。戦争は人の精神を侵し、適切な判断を困難にする。よって当時行われていたことは不本意のものであったという人がいるかもしれない。しかし事実であることを忘れてはならないと強く感じた。

3日目に行われた討論会は、日韓の学生が相互の立場から独立記念館見学を通しての感想や意見を述べ合うことができた充実したものであった。討論会を通じて、まず日本人の歴史への関心が薄いということを再認識した。韓国では、小学校の頃から授業で日本との関わりについて学び、また家族からも戦争当時の話を聞くという人もいう。一方の日本ではどうであろうか。歴史に興味をもち深い知識と認識をもつ人もいるが、大半の日本人（特に若い世代）は過去の出来事であって教科書の中のものと捉えており、そこに実感を伴わないことが多いのである。この事実を述べた時、ある韓国学生は大きな驚きをもったという。この意識の差は国家としての「謝罪」に対する考え方の差にもつながっているだろう。日本には侵略や従軍慰安婦問題など、韓国側が謝罪を求めている問題が未解決のまま残されている。この程ローマ法王が、過去にカトリック教徒が犯した罪に対し「謝罪」を行った。欧米ではこのように宗教・国家としての「謝罪」が重要であると認識しているのに対し、東アジアではその認識が薄いという。さらに同じ東アジアでも日本と韓国とでは差があるといえる。個人単位では存在する罪の意識が、国家としては表明されないのはなぜだろうか。民族としての性質の違いというところまで討論は進んだが、明確な答えは出されなかった。また、ただ謝罪すれば良いというわけではなく過去に対する認識とともに将来の相互の発展をも考えるべきだろう。この態度は独立記念館の「許すことは簡単だが、それで終わりにしてはならない。発展しながらの許しが必要である。」といった内容の表示や韓国学生から意見としてあがった。このような意見や討論内容から、歴史的事実を認識し囚われるだけではなく、現代に生きる日本人として同世代の韓国人とともに両

国の将来を考える必要性を実感するに至った。

3. 韓国における日本語教育について

3日目の討論会の後で、カトリック大学校の日本語授業に参加させていただく機会を得た。韓国では日本語教育が盛んで学習者数も多い。学習の動機はさまざまで、言語としての類似性や職業への関連などがあげられる。しかし、対日感情を考慮に入れた場合他に理由があるように思われたが、今回の旅行で日本文化の輸入がその一つであることがわかった。現代では多種多様な商品や文化が韓国に流入しており、若い世代を中心に韓国の日本文化への興味が高まっている。カトリック大学校の学生の中でも、日本の文化に強い関心を寄せている人もいた。このような多くの背景を持ちながら日本語を受講している学生は、とても意欲的であり、2～3年という学習歴でネイティブの日本人とコミュニケーションがとれるまでに至っている。また、学習者の意欲とともに教授する教師側の活動についても今後更に学んでいきたいと思っている。

4. おわりに

今回の韓国研修旅行では、多くのことを経験し学ぶことができました。このような機会を与えてくださった信州大学の沖裕子先生を初め、カトリック大学校の姜錫祐先生、カトリック大学校日本文化専攻の学生の方々、そして計画から関わり韓国国内でも案内をしてくださった信州大学3年の関淳奎さんに感謝いたします。

日本と韓国の友好、発展を願って

信州大学人文学部4年 佐々木清美（日本語教育学専攻）

韓国と日本は隣同士で、歴史的なつながりも深い。しかし、私がこれまで韓国についてよく理解していたかというとはほとんど何も知らないに等しかったと思う。そのため、今回韓国に行き、韓国の人々と接し、あらためて、韓国と日本の関係を見直す事ができた事はとても貴重な体験だった。

実際に韓国に行ってみて、少し意外だった事は、韓国と日本がとてもよく似ている事だった。隣の国ではあっても、違う国家の歴史を持ち、地理的にも隔てられている日本と韓国だから、私は全くの異文化圏に行く心積もりをしていた。だから、日本と韓国の間には多くの類似点が見られた事は私にとって、嬉しい発見だった。

ソウル市内の高層ビルの立ち並ぶ街並み。車の流れの絶えることない道路。テレビの番組、流行、街を行く人々の服装。目に飛び込んでくる文字のほとんどがハングルではあるが、目に映るものが日本のものとよく似ていて、親近感がわいた。

韓国での3日間私たちに同行してくれたカトリック大学校の日本語科の学生のみなさんは、ことばが通じない事が不思議に思えるほど、私たちは同じように感じ、考えているように思われた。

もちろん、韓国には独自の素晴らしい文化がたくさんあり、そのいくらかではあったがこの旅行の間に触れることができたのも大きな収穫だった。

しかし、私が日本と韓国の相違で最も重く悲しい事は、過去に起きた戦争に対する意識だった。

日本の韓国植民地化について、私は教科書で学んだことぐらいの知識しかなかった。時折ニュースで、韓国への責任問題が取りざたされる時も、私は無知であったためとくに感慨も覚えずにいた。そのため独立記念館に行き、今も大きな問題としてたびたび取り扱われている日本の朝鮮植民地化について、韓国の側からはどのように考えられているのかを知ることは、私にとって、この旅行の大きな目的だった。

独立記念館まではソウル市内から高速道路を使って1時間30分ほどかかった。タクシーを降り広大な敷地を進んでいくと、まず見えてくるのはカメラのファインダーに収まらないほど大きな門。そして、中庭をぐるりとめぐるように配置された第七館までの展示館。日本では考えられないスケールの大きさだった。そして、この建物自体が韓国の愛国精神を現わしているように思えた。

独立記念館を見学しこれまで知らなかった朝鮮の歴史的な背景を知り、戦争についての多くの史料を目にし、私はただ圧倒されて、それらを自分のものとして消化するのに時間を要した。

今でもまだ考えがしっかりとまとまったわけではない。しかし、カトリック大学校での討論会や、日本人どうしで話し合ってみて、確かに感じるのは「知ることは大きな力だ。知らないことは罪だ。」ということだ。

「悲しい過去のことは水に流しましょうよ。」と言ってくれる学生もいた。その学生は日本人に祖父を殺されたという。仇とも言える日本人にそのように言ってもらえて本当にありがたいことだと思う。

真実が何かは、今となっては推測の域を越えない。しかし、日本が朝鮮へ兵を出し、多くの朝鮮民族の命を絶ったことはおそらく事実だろう。私はこの事実を謙虚に受け止め、その上で韓国との友好関係を築いていきたい。そして、これは私たちの世代に課せられた責任のように思う。

最後になりましたが、私たちを快く受け入れ、歓迎して下さったカトリック大学校のカン先生、津崎先生、中野先生、日本語科の学生のみなさん、韓国でのスケジュールの調整をして下さったミンさん、このたびが素晴らしいものになったのは、みなさんのおかげでした。どうもありがとうございました。

そして、今回の韓国旅行を立案、私たちを韓国まで導いて下さった沖先生に心から感謝申し上げます。

近い国

信州大学人文学部 4年 博多理恵（日本語教育学専攻）

初めて韓国を訪れ、「韓国は近い国だなあ」という印象を持った。飛行機で行けば2時間そこそこで着いてしまう。まるで国内旅行のようだ。なにも物理的な近さだけを感じたわけではない。正直言って、韓国にいるとき自分が外国にいるという実感があまりなかった。おそらく、なじみの人達と一緒に行動し、関さんの通訳に頼りっぱなしということが大きいだろう。けれどそれ以上に街の景色や行き交う人々の姿があまりにも日本のそれと似ているので、初めて来た国なのになんとか落ち着いた気分になってしまった。韓国の人達から見れば、自分はどこから見ても日本人つまり外人なのかもしれないが、当の本人は自分の国にいるような錯覚をしていた。こういうのを図々しいというのだろうか。

カトリック大学校のみなさんと話していても、日本人の友だちと話しているのとあまり変わらない。「ああ、こういうタイプの友だちいたな」というような感覚だ。携帯電話で話し、カラオケで歌い、ダンス・ダンスレボリューションで踊っている韓国の同世代の人達を見ていると、親しみを感じないでいることは不可能だ。もし自分がもっと長く韓国に滞在し、日常生活をここで送っていけば、いろいろと文化や習慣の違いを感じることもあろうが、4日間の滞在でまず感じたのは「ああ、日本と似てるな」ということだった。

独立記念館は韓国と日本の痛ましい歴史を刻んだ場所なので、初めは少し身構えてしまったがカトリック大学校のみなさんが一生懸命に説明して下さったので、嬉しかった。日本人として韓国の人達に申し訳ないと思う気持ちと、それでもやはり韓国の人達と長く付き合っていきたいと思う気持ちがないまぜになった。おそらく、案内してくれた方々にも複雑な思いがあったことと思う。お互いに複雑な心境でありながらも、一緒に見学できたのは有意義なことだった。

4日間を通して、何かについて思いをめぐらすこともなくはなかったが、とにかく楽しく毎日を過ごしていた。韓国の食事もおいしくて、日本に帰ってからも毎日のようにお土産のキムチを食べている。国と国について考えることはとても難しい。けれども、自分が出会った人達について考えることは難しくない。彼女たちと出会って、もっともっと韓国について知りたいと思うようになった。同時に自分の国についても知り、自分の言葉で紹介できるようになりたいと思った。

ソウル旅行記

信州大学人文学部 3年 坂下智美（日本語教育学専攻）

3月6日（月）

朝、8時過ぎに松本駅に着く。早く来すぎた。切符を買い待合室で皆が来るのを待つ。寒い。ソウルはもっと寒いのだろうか。集合時間が近づくと、だんだん皆が集まってきた。これから4日間を共にする仲間だ。考えてみれば日本語教育の皆と旅をするのもこれが初めてだ。どんな旅になるのだろうか。

9:02発の「しなの」に乗り込み、名古屋に向かう。

混んでるなかをなんとか座り、うとうとと眠っているとあつという間に名古屋に着いた。名古屋は暖かい。もう春を迎えているのか。そこからバスで空港へ行く。

名古屋空港は国際空港といっても発着便は少なく、人もまばらだ。日本語に混じってときどき韓国語らしきものが聞こえる。手続きを済ませ、しばらく昼食をとったりして時間を潰し、いよいよ飛行機に乗り込む。アジアナ航空の機体はグレーのシンプルなデザインでなんだか好きだ。名古屋からソウルまではわずか2時間足らず。近い。松本からの時間を考えても、私の実家のある能登半島に行くよりも早くソウルに着いてしまう。不思議な気分だ。

短いフライトを終え、いよいよソウルに入る。空港内を行き交う人々の顔はアジア人のものばかりだ。それも東アジアの顔だ。この旅全体を通してみても、私が見たアジア系以外の顔は5人に満たないのではないだろうか。

入国手続きを済ませ、ゲートを出ると、懐かしいミンさんの顔と「信州大学いらっしやいませ」の紙をもったカトリック大の皆さんの顔が見えた。いよいよ韓国の旅が始まるのだと実感した。カトリック大の人達は、皆背が高く色白で大人っぽい。日本にいるときにミンさんが「日本の女の子より韓国の女の子の方がきれい」と言っていたが、成程その通りだ。

お互いに簡単な自己紹介をして、地下鉄で移動する。地下鉄に乗り込んでからはソ・ヒギョンさんと話をした。日本語がとても上手だ。車内で新聞を読んでいる人がいてちらりと見てみるとヤクルトの広告が大きく載っていた。しかしそれ以上に日付が7日になっているのに驚いた。地下鉄の車内の風景は日本と変わらないのに、やはりここは日本ではないのだ。

地下鉄を降りて、地上にでると歩いてすぐ近くに宿があった。部屋の中はエアコンがないのに暖かい。社会の授業で名前だけは知っていたオンドルだ。つつるの床が適度にぬるく、室内の空気が暑くなることはないのとても良い。部屋の隅に積んである布団も色鮮やかな布が縫付けてあって、そんなことで私の心はうきうきした。

一旦、カトリック大の皆さんと別れて待望の焼肉屋で夕食となった。旅で疲れた喉にビールは最高においしく、お店の人がどんどん焼いてくれるお肉を食べるとみるみる元気が湧いてきた。ご飯も日本のとは違った赤いご飯だったがとてもおいしい。味噌仕立てのスープはとても懐かしい味がした。子供の頃、お寺で食べた味だ。

焼肉に満足し上機嫌で宿に戻る。カトリック大の皆さんと合流し、日本人、韓国人一人ずつのペアをつくる。私のパートナーはキム・ジョンミンさんだ。3つの部屋に別れてお酒の席になった。韓国のお酒やお菓子が用意されている。韓国で人気のある百歳酒や竹露、濁り酒は比較的飲みやすかったが、お酒の弱い私は一人だけ真っ赤になっていた。

韓国では2月から新学年が始まるので、3年生といっても私よりひとつ下なのだと知った。それにしても大人っぽい。

カトリック大の皆さんは宿から地下鉄で1～2時間のところに住んでいるらしく、10時過ぎに帰っていった。そんなに遠くからわざわざ来てくれていたと知り、とても感激した。「また明日ね」と手を振って別れる。今まで外国に行って、現地の人と「また明日」なんて言葉を交したことはなかった。そんなことを布団の中で思いながら、深い眠りに入っていった。

3月7日（火）

朝。布団の中で目覚める。もう少し眠っていたい。韓国で向かえる初めての朝だ。などと思う間もなく身支度を済ませる。ロビーに出ると、ミンさんが待っていてくれた。宿のすぐそばの食堂で朝食をとる。食堂のおじさんとおばさんが笑顔で「アンニョンハセヨ」と迎えてくれた。朝食は焼肉と同じくらい食べたかった本場の石焼ビビンバだ。石焼の名の如く、重そうな石の器がでてきた。具の下は焼肉屋ででたのと違って白いご飯だ。スプーンでよく混ぜて食べる。熱い石で底のご飯がおこげになってうれしい。しかし辛い。熱くて辛い。辛くて熱い。鼻をすすりながら食べた。とてもおいしい。

今日は独立記念館を見学する。カトリック大の皆さんも同行してくれる。私のパートナーのジョンミンは、家から宿まで2時間かかるというから往復4時間。ほとんど寝てないのではないだろうか。授業もあるだろうに私達に付き添ってくれて、本当にありがたいと思う。

ワゴンに乗り込み、記念館へと出発する。道路は車線が多い。ソウルは都会なのだ。車の中では、お互いの家族のこと、日本や韓国の映画の話などをした。ジョンミンはとても面白い人だ。幼馴染みの男の子が軍隊に入っていると聞いた。日本では考えられないことなので想像がつかない。

窓から見える景色は日本と変わらないようにみえた。田んぼやビニールハウスが続く。

インターチェンジで休憩。あったかい揚げ菓子を貰う。あんこが入っていておいしい。韓国であんこを食べるとは思っていなかった。よく考えれば中国にもあるからそのつながりがあるのだろう。ジョンミンが韓国の伝統的な飲みもの（お米から作った

ジュース)を買ってくれた。缶をよく見るとヤクルトが製造しているものだった。恐るべしヤクルト。

再びワゴンに乗り、30分もすると独立記念館に着いた。大きい。敷地が広い。車を降りてから記念館までが遠い。風が強くて寒い。気温は松本と変わらないが、風が強い。ジョンミンと腕をくんで歩く。韓国では女性同士、腕をくむのが普通なのだそう。小学校の頃、仲の良い友達と腕をくんで廊下を歩いたのを思い出し懐かしい気分だ。

館内に入る。古代の歴史から現代まで、7つの館がある。広い。

戦争の部分になると、しだいに気が重くなる。中でも拷問場面を再現した蝸人形や耳を撃たれた人の写真、次々に人が射殺される映像はショックだった。とても、現実にあったこととは思えなかったし思いたくなかった。それでも事実は事実だし、それは知っておくべきことだ。

戦争について学校で教えられてきたことは、家族を失ったり、家を焼かれたり、かわいそうな被害者の立場のものばかりだった。加害者の立場にたった具体的なものは説明されなかった。小学生に教えるならそれだけでいいかもしれない。でも、中学生以上には、戦争について、戦争をおこしてはいけないことについて考えさせるには、戦争の闇の部分も教えなくてはいけないのではないだろうか。教育のひとつとしてそうしなければ、おそらく大部分の人が無知なままでやり過ごし、同じことを繰り返してしまうだろう。

戦争になれば人間はどうなるかわからない。悪循環から抜け出せなくなる。戦争を起こさないように、戦争を忘れないために、これからの未来のために。独立記念館をこの目で見たことは貴重な経験だった。が、日韓の関係を考えるにはまだまだ知識不足だ。

昼食は海苔巻。日本の海苔巻より韓国の海苔巻のほうが好きだ。あんこにしろ海苔巻にしろ、韓国と日本は海を渡ってつながっているのだ。そして一方で海が両国を隔てている。

独立記念館を去り、中華料理屋で夕食をとる。どれも日本の中華料理屋では食べられない、韓国流中華だがおいしい。漠然とアジアの味だなと感じる。食事を終えカトリック大の皆さんと別れる。昨日会ったばかりという気がしない。明日も会えると思うとうれしい。

3月8日(水)

韓国滞在3日目。慣れてきたと思いきや実質今日が最後の日でもある。昨日と同じ食堂へ行く。今日はカルビ・タンというスープ。牛肉(骨)からとったダシがよくできていておいしい。なにより胃にやさしい。赤米のご飯をいれて雑炊のように食べると

またおいしい。

滞在期間が短いせいもあるかもしれないが、韓国の食べ物はおいしいので全然日本の味が恋しくならない。

朝食後、地下鉄でカトリック大に向かう。大学に近い駅までいくと、シンさんたちが迎えにきてくれていた。スクールバスに乗る。大学は坂の上であり、とても大きかった。

外は雪が降っている。今日も寒い。ソウルの雪は日本海の雪と同じぼた雪でどんどん地面を白でうめつくそうとしていた。

学食に入ると学生が思い思いに時間を過ごしている。そこでココアを飲み、しばらくしてから専攻ごとの学生の控室に行った。そこでカン先生と沖先生がお互いの学生を紹介しあった。カン先生はとても優しそうで何故か初めてお会いしたという気がしない。国際交流委員会の方のはからいで、教員専用の食堂でお昼をご馳走になった。昼食を終え、オンドルの広い部屋で独立記念館や戦争についての討論会となる。カトリック大の皆さんに戦争中の日本についてどう思うか聞いてみたところ、「過去は過去。大切なのは未来」という意見がでた。正直、韓国の人たちがどのような戦争教育を受け、日本に対してどのような感情を持っているのか心配だった。カトリック大の人達は、学校の先生や家族から「事実」を聞いてきたし修学旅行で独立記念館に行ったりしてきたが、過去よりこれから目を向けているようだ。私達若い世代は戦争を知らない。戦争について聞き知っても、実際に体験した人達が持つ感情をそのまま受け継ぐことはできない。だからこそ、過去を知り過去を踏まえた上で、新しい日韓の関係が築けるのではないか。それとも個人レベルではできても国家間のこととなるとそうはいかないのだろうか・・・。

討論会の後は、韓国の伝統的な着物・ハンボクを着させてもらった。色が鮮やかでどれも素敵だ。私は桃色のハンボクを着させて貰い、似合うと言われるとおせじでもうれしかった。

少し早めの夕食を食べに行く。スープの中に冷麦に似た麺が入っている。私はそこにどんどんキムチをいれ、最後には隣のミンさんと同じ位スープが赤くなっていた。

再び学校に戻り、日本語の授業を見学させて頂くことになっていたのだが、「本物当てクイズ」の出題者の役を日本人の私達がすることになった。出題する側は3人チームになり、3人のうち本当のことを言っているのは誰かを質問して当てるというゲームである。質問に答えると笑ってくれたりして反応が良く、とても楽しかった。夜はカラオケをしにいった。韓国の歌は歌詞はわからないが、とても良かった。日本語の歌もあり、カン先生が長淵剛の「とんぼ」を熱唱されていた。プロ級の歌に皆聴きほ

れていた。

帰りがけに、ミュンジンがテーブルの上にあるスルメを指して、好きかと聞くので好きと答えるとスルメをまるごと私に持たせてくれたのが思い出深い。カラオケに行く途中でも、私がお店に並んでいるお菓子を見ていると、シンさんがすばやく買ってきてくれたりして、カトリック大の人達は躊躇することなく、私達に何かしてくれていた。空港に出迎えてくれたことから始まり、カトリック大の皆さんには予想以上に良くしていただいて心から感激している。

カラオケをでた後も、夜遅いのに東大門まで一緒に行っていた。東大門は深夜とは思えないほど人と活気が溢れている。屋台にも入り、これまでとは違った韓国の味に触れることができた。もう一人の（2年生の）シンさんもお茶目で面白い人だ。

カトリック大のみなさんと別れるときは本当にさみしかった。たった3日間の旅をととても楽しく、濃く、充実した旅にしてくれた。お母さんのように私を引っばってくれたジョンミン、明るい笑顔のシンさん、ミュンジョン、冗談ばかり言うシンさん、最初にお話したヒギョンさんをはじめ、皆さん本当に私達のために時間をさいて心をつくしてくれた。日本語でのコミュニケーションは大変だっただろうに。何度「カムサハムニダ」と言っても言い足りないくらい。もう「また明日」ではないのだ。ほんとにさみしい。

また、いつか、ソウルで、日本で、会えることを願っています。カムサハムニダ。

3月9日（木）

朝。ソウル最後の朝。いつもの食堂で朝食をとる。食堂のおばさんたちとも今日でお別れだ。おばさんたちはいつものように笑顔で送りだしてくれた。宿の人とも別れ、ミンさんともしばらくお別れだ。ミンさんには毎日宿まで迎えに来てもらい、宿まで送ってもらった。ソウルで私達が安心して楽しんでいられたのも、ミンさんがずっとついていてくれたからだ。ミンさん、本当にありがとうございました。大学であったら改めてお礼を言いたいです。

地下鉄で空港まで行き、行きと同じアジアナの機体に乗り込む。ソウルを発ち、日本に向かう。しばらく経つと窓から日本がみえてくる。あつという間だ。ソウルに向かうときは近いと思ったけど、次にソウルに行くのはいつになるかと考えると帰りはなんだか遠く感じる。韓国はやはり外国なのだ。名古屋に到着する。日本だ。

・・・私がこの旅でもっとも学んだことは、心を尽くすということだったように思います。相手を理解し相手のことを思うこと、相手が、皆が喜ぶようにしたいと思うこと。この心は異文化であれ同じ文化の者であれ変わらない人間の大切な心です。この旅はこの心に触れ、感じる事がとても多い旅でした。韓国を知るにも韓国を通して日本を知るにも、この旅はあまりに短い旅でしたが、一番大切な基本的な心を実感

して学ぶことができたと思います。いい旅になりました。

A 4一枚で収める筈がこんなに長くなってしまいました。たった3泊4日の旅でしたが、これまでの旅とはまた違った、充実した良い旅でした。これも皆、カン先生をはじめカトリック大学校の皆さんのあたたかいおもてなしと、この旅を実現させてくださった沖先生、ソウルで走り回ってくださったミンさん、一行を率いてくださった団長・佐々木さん、列の最後尾についてくださった青柳さん、チケットの手配、会計、班長などそれぞれの役を責任持って果たしてくださった先輩方、一緒に旅した2年生、皆さんのおかげだと思っています。ここに改めて感謝したいと思います。

ありがとうございました。カムサハムニダ！！

架け橋

信州大学人文学部3年 関 淳奎（日本語教育学専攻）・世話人

沖先生から韓国にゼミ旅行というのはいかがなものかと尋ねられた。

私は迷わず、いいですね、と即座に返事をしていた。

今から8年前、その時通っていた韓国の大学2年生だったある日、指導教官から日本を訪れる一ヶ月間の旅行プログラムに参加しないかと勧められた。君さえよければ、うちの大学の代表として推薦したいとのことだった。詳しいプログラムの内容は知らなかったが、ただで日本旅行なら悪くないと思った。

そのプログラムは名前からして仰々しかった。「21世紀のための友情計画」。宮沢総理のお招きで行くとのこと。いったい何をするのか。内容を見てみても広島、奈良、京都というところを観光すること、静岡でのホームステイ、そして、熱海というところでの日本大学生代表との討論会及び交流会というのがほとんどだった。

まあ、ただだからな。

韓国大学生代表25人、日本大学生30人が熱海で集まって3泊4日間をともにする経験をするまでは、少なくともそうであった。

それをきっかけに私は日本を3回訪れている。その中の1回はただの旅行ではなく、3ヶ月間の語学研修だった。もちろん、部屋を一緒に使ったのは、その「21世紀のための友情計画」のメンバー。逆に、日本のそのメンバーを韓国に招いただけでもおよそ、10回は軽く超える。一緒に中国旅行に行ったりもした。

私は日本留学を決心した。出発を前にして祖父にもあいさつに行った。

日本帝国時代に駅長を勤めていた祖父は、意外にも、

“日本人は責任感が強く、やさしい人たちなんだよ”

と言ってくれた。徹底した反日政策と親米政策を並行することによって政権を維持しようとした李承晩政権で育ってきた父が、

“気を付けるんだぞ、日本人は怖い人達なんだぞ”

と言ってきたのと、祖父の話は奇妙にも食い違いを見せていた。いったい何がそうさせていたのであろう。

数多くの私費外国人留学生は、実際の生活空間でたくさんの日本人と出会っていく。学校以外の場面では、失敗してしかられたり、わからなくて恥をかいたりすることも多々ある。いつかはあまりにも日本の生活と日本人に耐えられなくなって、「友情計画」の親友に電話をかけ、愚痴をこぼしたことがある。

“むしろ、おまえに会わなかったらよかったのに、オレ、日本人のことがいいやつばかりだと勘違いしていたのかも”

“ハッハッハッ 今、お前が相談しているオレは何人なの？オレも日本人なんだけど”

友達作りを目標として「21世紀の友情計画」が開催された。そして、私は、そこで実際に、国を超えた生涯の友を得た。日本に対する信頼感の出発点は、あの会だったのである。そういえば、今年もそろそろ「友情計画」のあいつらが信州に遊びに来る頃になった。

沖先生から韓国旅行を相談された時に私は、

“今度は私が架け橋になる番だ”

と、心に誓っていた。

韓国文化研修旅行を振り返って

信州大学人文学部2年 於本七瀬（日本語教育学専攻）

1. 出発前の準備

この韓国行きが決まり、私たちは二度ほど全員で集まり、勉強会をひらいた。今回の目的は、「韓国の日本語教育の現状を知る」、「韓国の今までの歴史（昔の姿）、今の姿を見る」ということが全体の目的であることを確認した。また、実際に中に入っていくことで、ネイティブの感覚を知ること、異文化を受け入れること、そして私たちの文化を伝えていくことが少しでもできればいいなという気持ちを持っていた。さらに、個人的には、初めての海外ということもあり、異国の異文化に接する機会は今までなかったもので、接し方を学ぶということも目的にあった。また、現在の韓国の学生が持つ、日本に対するイメージはどんなものなのか、日本語教育に対する意識はどのようなのか、ということに関心があった。韓国の人々は、日本に対して誰でも少なからず反発心や嫌悪感を抱いているものなのではないかという考えがあったので、カトリック大学の学生の方々との交流が予定に入っていたが、少し相手の反応が、怖くもあった。

2. 到着

韓国までは飛行機で行くと本当に早く、空港へ着いても違和感を感じることもなく、外見も変ることはないので、外国に来たという実感がなかった。

空港には、カトリック大学校の学生さん方が迎えにきてくださっていた。皆さんとてもあたたかく私たちの到着を喜んでくれているようだった。そこから宿舎まで地下鉄で一時間近くかかったが、その間に自己紹介をして、お互いの大学のことなどを話したりなどしたが、みなさん日本に強い関心があるようで、偏見視したりするようなことはないようだった。

3. 独立記念館見学

二日目に、韓国の独立運動に参加した人たちの偉業を伝えるために設立された独立記念館をカトリック大学校の学生さんたちも同行して訪れた。1982年、日本で歴史の教科書の、歪曲問題が起こったことがきっかけとなり、独立運動に参加した人たちの業績を正しく伝えようという目的で建設されたのがこの記念館だということだ。韓国には他にもいくつかこのような目的の建物があるらしかった。実際、私達が訪れた独立記念館は、想像以上に広大だった。更に、七つもの展示館に分かれており、ひとつひとつの手の込んだ作りから、韓国の人々の愛国心、独立を果たすまでの強い思いが伝わってくるようだった。展示物の説明文は、ハングルで書かれているもので、英語での説明もほとんどなかった。日本語での説明がなされているところももちろんなかったが、第三展示館の日帝の侵略館で、日本の官憲が、実際に韓国人に行ったという拷問の様子を見せるろうにん形の展示のところにだけ、「これらは、実際の証言に基づき、忠実に再現したものである。このような悲惨な出来事は二度と繰り返してはならないという意味を込めて残すものである。」という内容の説明が日本語でも書かれてあったのが印象深かった。

4. 独立記念館見学後の討論会

三日目に、カトリック大学校の施設内で日本と韓国両方の意見を述べ合う形で昨日の独立記念館見学後の討論会を行った。しかし、韓国の学生さん方の日本語の能力の関係で、そこまで難しい話し合いに発展することはなかったが、お互いに質問を出し合う中で、韓国の学生の間で、戦争時代の日本のことを考えて、日本に対してどのような感情を抱いているか、ということを探ねたところ、日本を特に敵対視したり、嫌悪感を抱いたり、などという風潮は全体的にはあまりなく、むしろ過去のことよりも未来のことにより目を向けて日本に対して友好関係を望んでいる傾向が強いらしいという意見が得られた。しかし、中にはもちろん日本を強く嫌っている人もいるのは確かである。韓国では、授業の一環として、独立記念館を訪れており、たくさん戦争時代のことは聞かされているようだが、現在は過去にこだわるよりも、若者は、未来のことを考えていくべきであるという考え方が多い。しかし、一旦自分の国を出れば、

まわりから見れば、例えば「日本人」「韓国人」としてそれぞれの国の過去を少なからず背負うことになる。周囲からの先入観から逃れることはできないのではないか。やはり、過去に無関心ではいけない。「公の流れの中にある個人」ということを常に意識して、自分の国の歴史はできるだけ正確に知っておく義務があるのではないかと考えた。

5. カトリック大学校訪問

カトリック大学校は、大変広い敷地だった。今回は特別に、日本語の授業に参加できる機会を得られた。学生の皆さんは、ちょうど初級が修了した程度ということだったので、あまり難しいことばは話さないようにして、できるだけ複文は用いずに、単文で表現するように注意を受けた。しかし、クラスの中には、まるで、ネイティブと同様にスラスラと日本語の表現ができる人もいて皆さんのレベルの高さに驚いた。授業の様子は、信州大学の英会話の授業を思い出させた。われわれ日本人は中学校から今までの間、長い間英語に接しているはずなのに、なかなか思うように身につかないでいる。一方韓国では、日本語は「第二外国語」であるはずである。それにもかかわらず、短期間でこれだけ使いこなせるようになるのだからすごいことだと感じたと同時に、日本の外国語教育の問題を考えさせられた。

6. 韓国の文化について

今回の旅行の中で韓国の文化について触れられたことをあげてみるとまずは、韓国の民族衣装である「韓服(ハンボク)」を着る機会があったことがひとつある。カトリック大学校の学生の方に着せていただいたのだが、日本の着物のように重みがあり、しっとりした感触ではなく、とても軽く、着方も難しくないようだった。本当に色鮮やかでふわふわと、風になびくような感じだった。もう一つあげるとすればやはり食文化についてである。全般的にとうがらし、にんにくなどが効いたからいものばかりで、特に、キムチは、毎食必ず食卓に出されていた。そのキムチの種類の中で、日本の大根の漬物に大変よく似たものがあり、少し酸味が強いのが違っていたが、日本の食事を思い出させてくれた。

また、韓国のソウルの町を眺めていて気になったことは、キリスト教の教会が本当に多かったことである。また、高いビルのような建物はほとんど「アパート」であり、ソウル内の人口の多さが感じられた。これは、東京以上であった。

7. 韓国文化研修旅行を終えて

全体を通して言えることは、少なくとも、私と同じ世代の韓国人の間では、日本に対して、私が出発前に不安に感じていたほど嫌悪感を抱いていないようだという事である。これは意外なことであった。今回は、広い年齢層と接する機会が得られなかったために狭いところしか見るができなかったが、同じ世代の人と、たくさん話

ができてそれだけでも収穫はあったようにおもう。

もう一つは言葉の問題である。今まで何気なく使っていた日本語を、韓国の学生にもわかるようにゆっくり、難しくならないように言葉を選んで、慎重にはなすことの難しさ、また、うまく表現しきれていない相手の日本語の内容を予測してうまく言い換えて確認したり、普段は意識しないことにまで神経を使うためにかなりのエネルギーを使った。このようなことは、日本にいた時にはあまり経験できないことであった。

私達は、ハングルの読み書きを全くできない状態であったのが、仕方がないこととはいえ、相手の言葉を全く理解せずに接することは問題があることだと反省した。次回の韓国訪問の機会までに少しでも身に付けたいと思った。

韓国文化研修旅行を終えて

信州大学人文学部 2年 城間友美（日本語教育学専攻）

3月6日、私達日本語教育学のメンバーは沖先生のご引率のもと、アジアナ OZ121で韓国へむけて出発した。はじめての海外旅行ということもあって、まだ見ぬ韓国への期待がふくらむ一方、やはり国外へでるとするのは少々不安があった。機内アナウンスやまわりでかわされるハングル語を聞きながら、今回の旅行で交流をもつ予定のカトリック大学校の人々とどういう風にコミュニケーションをとればいいのか、もし現地でみんなと離れたらどうすればよいのかなどと考えながら、言葉が通じるということがどれだけ安心感があるかということを知った。そうこうしているうちに、窓の外の景色は朝鮮半島のものとなり、やがてソウルの高層ビルがところどころ姿をあらわした。空港に到着すると、カトリック大学校のみなさんが手製のボードで我々を歓迎して下さった。関さんの司会によって、それぞれの自己紹介がすむと、ひとりひとりとの交流がはじまった。自分がハングルを離せないため、どれだけ意思が通じるかと心配していたが、カトリック大学校のみなさんは日本語がとても上手くまた、初対面ながらも積極的に話し掛けてくださったおかげで、ホテルでの親睦会もとても和やかに行われた。そこでパートナーをきめ、私には李香淑さんがついて下さることになった。

翌3月7日はカトリック大学校のみなさんのご案内によって、独立記念館を見学した。韓国と朝鮮半島の歴史を学ぶうえで、一般の観光客はあまり訪れないという独立記念館を見学できたことはとても貴重な体験であった。さすがに、日本人による朝鮮人の人々への拷問のコーナーでは目をそむけなくなりましたが、歴史の事実に向き合うということは必要であると感じた。また、説明しづらいところを私に伝えて下さった香淑さんへの感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。独立記念館では、日韓の過去と未来について深く考えさせられた。過去の事実を目をそむけることなく、今後どれだけ

我々が互いに歩みよれるのが問題であるように思う。

最終日はカトリック大学校見学で、美しい校内を案内していただき、憧れのハンボクも着ることができた。また、みなさんの授業にも参加でき、カン先生のお話もうかがうことができて、充実した一日であった。また、夜の東大門では韓国の熱気あるパワーを肌で感じた。香淑さんとの別れではただ涙がでるばかりで、初めて友人との別れの場面を強く意識したため、またいつか韓国を訪れる機会をぜひみつきたいと切に思った。

今回の旅行では、いろいろなものを得ることができたと改めて感じる。異文化交流はもちろん、歴史、友人、好奇心など。ただの観光では感じることのできないものを与えて下さった姜先生やカトリック大学校のみなさん、お世話になった関さん、4年生の先輩方、そして、このような機会をもうけて下さった沖先生に心から感謝の気持ちを申し上げたい。

韓国文化研修旅行を終えて

信州大学人文学部2年 中野真樹（日本語教育学専攻）

今回、韓国へ行く前に私自身の目標を三つ立てた。一つ目は、日本人として、外国人として、韓国を訪ねるということを忘れないこと。これは、自分が外国人であるということから目をそらさないことで、素直な気持ちで韓国を見ようと思ったからである。自分と違う、日本と違うものに対して、無理して同化しようとするのではなく、違うまま受け入れる、ということ意識しようと思った。二つ目は、日本が韓国を支配していたという事実についての認識を深め、今、韓国の人々が日本や日本人に対して、どのような気持ちを抱いているのかを自分なりに理解してくることであった。韓国人は日本人を恨んでいる、というイメージだけがずっとあり、実際のところはどのようなのだろう、とずっと気になっていたからである。そして三つ目は、異文化間交流を充分にしてくるということである。日本で生活している中では、自分が日本人であることを意識することなどめったにない。韓国という外国で、自分の周りがすべて異文化で覆われているという状態の中で、体全体で韓国を感じることができる。そこで感じるものを大切にすること。そして、日本語を学んでいる学生との交流の中で、日本人として、日本を伝えるということであった。

以上三つの目標を胸に出国した。韓国の空港に着いて私達は、ミンさん率いるカトリック大学校日本文化専攻の学生の皆さんからの熱烈な歓迎に驚いた。その歓迎に始まり彼女達は三日間毎日朝は早くから夜は遅くまで私達につき合ってくれた。本当に嬉しかったし、心からありがとうを言いたい。

二日目は、カトリック大学校の学生の方々に付き添ってもらいながら独立記念館へと

足を運んだ。独立記念館は、韓国の古代から現代までの歴史をたどった展示館、といったところで、日本が韓国を支配していた時代についても詳しく分かるようになっていた。この記念館が建てられたのも、日本で歴史の教科書の歪曲問題が起きたことがきっかけになり、独立運動に参加した人々の業績を正しく伝えることが目的であったということだ。日本人が朝鮮半島の人々に対して残酷なことをしている写真やビデオ、ろう人形による拷問シーンの再現などを、韓国人である皆さんに解説をしてもらいながら見てまわるのは、なにか居心地が悪く、もどかしかった。日本人のしたことを、同じ日本人として恥ずかしいと思う気持ちと、すっかり打ち解けた目の前にいるこの友達に対して、今、どのような態度をとったらよいのだろう、という戸惑いがあった。そして、彼女達は、やはり日本人を心の底では憎んでいるのではないかと、疑心暗鬼になっている自分がいた。その反面、こうして昔憎み合い、殺し合った日本人と韓国人の私達が一緒にその事実に向き、それについて話し合える今は、なんて平和なのだろう、と実感したりもした。そして、この平和にたどり着くまでに払ったたくさんの代償を私達は忘れてはいけない、と強く思った。

三日目の、カトリック大学校で行われた独立記念館を一緒に見学しての感想を話し合う、ちょっとした討論会では、実際に韓国の人々が抱く日本や日本人への感情について訊ねることができた。彼女達の話では、実際に戦争を経験した世代の韓国人には、日本を恨んでいる人が少なくないということであった。そして、世代を問わず、戦争のことが原因で日本に嫌悪感を抱いている人もやはりいるようであった。それでも、彼女達を含め、日本との関係を、過去に執着してばかりいるのではなく、両国の未来に目を向けようとする韓国人も多くいる、ということも分かった。私達の世代は、直接戦争を知らない。彼女達が、日本に対して前向きな気持ちを抱いているのは、私達がアメリカに対して、わざわざ戦争のことにこだわって常に見ているわけではないのと同じなのかなと思った。

独立記念館へは、大体の人が、学校の修学旅行や家族と出かけるなどして、足を運んでいるということであった。日本における広島平和記念公園のような存在のようだと感じた。私も、高校の修学旅行で広島原爆ドームを訪れた。やはり、生々しい展示品がたくさんあり、日本が受けた傷の大きさ、原爆の恐ろしさ、ひいては戦争の恐ろしさにぞっとした。しかし、韓国の独立記念館で、今度は日本が朝鮮半島の人々に行った数々の残虐な行為を目の当たりにし、今まで、戦争の被害者としての日本のイメージが強かった自分に気がついた。戦争をしている世代に生きていた人々は、誰しもが例外なく被害者であり、誰が加害者であるかということ言うのは難しいと思う。国家という大きな単位で行われる戦争は、国民を巻き込み、正常な判断ができない状況を作り出す。そうしなければ戦争に勝てないからである。しかし、それでも朝

鮮半島の人々にとって日本は恨まれて当然のことをした。これは事実なのである。拷問のシーンを再現した展示の解説の「許すことはできるけれど、忘れてはならない」という一節に私は深く共感した。二度と戦争を起こさないためには、それがいかに悲しく恐ろしい行為であるか、いかに多くの犠牲を伴うものなのかを忘れてはならないと思った。

三日目にお邪魔したカトリック大学校では、討論会だけでなく、ハンボクを学生の皆さんに着せてもらった。ハンボクは日本ではチマチョゴリという名前で知られている。ハンボクを着ての、座り方や歩き方、あいさつの仕方などを教えていただいた。ハンボクは、日本の着物と比べてとても軽く、華やかな感じがした。初めて浴衣を着せてもらったときのように嬉しく、脱ぐのが惜しかった。また、日本語の授業も見学させていただくことができた。日本語教育という分野に興味があり、日本語について勉強している私ではあるが、これまでに実際の日本語教育の現場というものに接する機会はほとんどなかった。そんな私にとって、この授業見学はとても貴重な体験であった。

最後に、今回の韓国旅行を振り返って、もっとも印象深かったのは、カトリック大学校の学生の皆さんの、私達に対する心遣いであった。そこには私達の様々な質問に、日本語で一生懸命に答えようとする姿がいつもあった。そして、日本のこと、私達のことを知ろうとしてくれる姿勢がいつも感じられた。今一度、心からお礼を言いたい。本当にありがとうございました。また、今回日本と韓国の橋渡しの役割をしてくださったミンさん、私達を受け入れてくださった、カン先生をはじめとするカトリック大学の皆さん、このような旅行を計画してくださった沖先生に深く感謝申し上げます。